

優秀賞 カギムラさん（大阪府 高校2年）

現代社会は貧困・環境破壊・性差別や紛争といった課題を抱えている。それらを17のゴールと169のターゲットでカバーしたのがSDGsである。これらの目標を達成し「持続可能な社会」を構築することが我々の使命である。

まず私は持続可能な社会と現状を比較し、現在の地球を覆っている社会・文明のスタイルには構造的問題が存在すると考えた。

現代社会の構造的な問題点、それは「野放図な市場競争」である。この解消無くしては、いくら画期的な技術が生み出されようとも真の持続可能な社会は永遠に実現しない。

我々が身につけている衣服を例にとろう。2013年、バングラディッシュの商業ビル、ラナプラザが突如として崩壊、1000人以上が死亡するという事件が起きた。犠牲になったのは、月3900円程度の低賃金とパワハラ・セクハラが横行する劣悪な環境で働いていた若い女性が多かったという。この事件が特に注目された理由は他にもある。それは、彼女達に商品を発注していたのは誰もが知るような大企業の面々であったからだ。この事件は企業による労働搾取の象徴として大きく報じられた。

また、衣料品は環境問題にもつながっている。WWFによると、衣料品の主要な原料である綿花の栽培には、シャツ一枚あたり2900リットルもの膨大な量の水が必要となるという。これは実に人間一人あたりの飲水量900日分にも匹敵する。大量の汲み上げや灌漑は河川の生態系にも影響する。インダス川では、固有種のガンジスカワイルカが絶滅の危機に瀕しているという。

水資源の枯渇は紛争の増加も招く。例えばシリアは2006年から深刻な干ばつに見舞われ、80万もの人々が職と仕事を失った。それがアラブの春と重なった結果、政府に対する不満が爆発し、21世紀最大の人道危機と呼ばれるシリア内戦へと至ったのである。

今我々の持つ衣服一つとっても、労働問題、環境問題、紛争問題といった課題が浮き彫りになるのである。

これらの問題の根本原因として、「野放図な市場競争」があると考えなのだ。利潤を得るために企業は生産コストを削る。労働環境は二の次で、賃金が安い発展途上国に生産を発注する。生産側は代金を得るため危険があっても操業を続ける。資源は持続性よりも経済性を重視され、大量に消費される。少なくなった資源を巡って紛争が激化する。

この解消を念頭に私は未来構想を考えた。

私の考える 2050 年は、地球上の生産量と消費量がすべてデータ化された世界である。コンピュータとデータ通信技術の発展によって、世界中の鉱山、農場、工場から生産量を集積、どこの地域でどの資源が何トン使われたかを把握して、最終的にどこでどれだけ消費されどんな物質が発生したかまで特定する。

そしてここで人工知能が登場し、現行の生産・消費ペースでの資源の持続性を計算する。それが持続不可能なレベルにまで加速していれば、生産消費に関わる国家に勧告を行う。国家は生産を行う企業・工場などに対し、素材の見直しや生産方式の変更を行うよう働きかけ、消費者に対しては価格の調整や代替品の啓発などを行う。

確かに、この仕組みは今まで享受してきた「自由」を抑制するものかもしれない。しかし、2050 年には 100 億に達する人類が環境的負荷を無視して競争を行えば、環境に及ぼす影響は計り知れない。それはかえって、「安全な環境で暮らす自由」と言う別の自由を奪うことになりかねない、というのが私の考えだ。

その端緒を既に我々は知っているのではないだろうか。太平洋島嶼国の水没や洪水の頻発がよく報じられるようになった。住民は間違いなく生活の自由を奪われている。

我々は理性を持って消費生活への執着から離れるべき時がもう来ている。

「もったいない」と科学の融合こそが、我々に新たな扉を開くのである。